

復原に関する助言・指導を現地においておこなった。

各地の文化財建造物の修復事業への助言・指導 光福寺（静岡県）、大阪中之島公会堂（大阪市）、山口県旧県会議事堂（山口県）、釣島灯台退息所（松山市）、西田橋（鹿児島県）などの保存修復にあたり、現地において助言・指導した。
（木村 勉）

書跡資料の調査

南都諸寺所蔵の典籍文書の調査は、前年に引き続いで薬師寺、興福寺、法隆寺について調査を実施した。薬師寺は、経箱第25～28函について調査をおこない、第22、23函を写真撮影した。調査と併せて、DB化も第23函までおこなった。全体の調査はまだ終了しないが、次年度で、調査終了分については区切りをつける予定である。興福寺は典籍文書目録第三卷分にあたる経箱第61函以降である。現在調査中の箱は、第61、69、70函の調査をおこなっている。法隆寺は、記録文書の目録作りであるが、概ね出来上がりに近づいている。

南都以外では、仁和寺の御経蔵目録の第1分冊を、管理調査用の稿本として作成しつつある。現在調査は、文化庁や科研調査に協力するかたちで、奈文研及び奈文研OBが数人参加しているが、従来奈文研が調査してきた成果を資料の管理調査用に活用しようとするものである。その他、醍醐寺文書、石山寺聖教の調査をした。また、文化庁や教育委員会の依頼を受け、奈良東大寺修二会関係資料、滋賀永源寺文書、京都興聖寺一切経、東福寺文書などの調査に協力をした。

北浦定政関係資料では、北浦宅での補足調査や「平城旧址之図」の写本の調査をした。
（綾村 宏）

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターの6研究室と情報資料室および各人がそれぞれの課題を定めて進めている研究があり、多くは前年から継続しているものである。1997年度には次のものがあり、そのうちのいくつかについては別頁で報告している（*印）。ここでは他のもののいくつかを紹介する。

全国不動産文化財情報システムの普及流通に関する調査研究/文化財情報ネットワークにおける通信法の研究/遺跡地図構報システムの開発研究/縄文編年の学史的研究/東アジア古代都城の比較研究*/古代地方末端官衙

遺跡の調査研究/古代倉庫遺構の集成的研究/古代豪族居館遺跡の研究/動物遺存体による生業活動の復原的研究/遺跡土壤の微細形態学的研究/残存脂質分析による生活環境の復原的研究/古気候の復原的研究/年輪年代法による白頭山巨大噴火年代の解明/年輪年代法による弥生・古墳時代開始時期に関する研究/広域遺構探査法の開発研究*/東アジア古代の庭園遺構の比較研究/文化遺産の地域特性に関する研究/復原建物の構造安定性に関する研究/常時微動測定による古建築の構造に関する研究*/金銅製造物の保存科学的研究/飛鳥・藤原・平城宮跡等出土品の保存処理/東アジアの古代塑像・壁画の技法的研究/有機質遺物の材質分析とその保存処理法の開発研究*/劣化写真のデジタル画像による復原/解析図化システムによる文化財計測法の開発/南アジア仏教遺跡の研究/発掘調査支援機械システムの開発研究/陶磁器文化の交流に関する科学的研究/日韓古代における埋葬法の比較研究

埋蔵文化財関係情報処理の現状 奈文研ホームページは、研究所による現在までの調査研究成果の公開と、平城宮跡の現況の紹介に特に力を入れて整備を続けていく。外部からのアクセス件数も1ヶ月1000件を越えており、また、電子メールでの質問も受け付けているので、一般の人々に対する文化財の調査研究についての情報公開に大きく貢献していると考える。

全国不動産文化財情報システムの現状 インターネット経由でのデータベースの公開を始めた。校正用のシステムでは本年度も遺跡情報の収集を続け、データの変更・更新を行っている。要望の多い画像情報の取り込みについては、どのようにして実現するか、システムの検討を行っている。膨大な遺跡数を前にたじろぎながらも前進しているというのが実感である。

年輪年代法による白頭山巨大噴火年代の解明 中国北東部にそびえる長白山一白頭山（2,744m）の噴火による火砕流で埋没したマンシュウカラマツ樹林の炭化材のもつ年輪から、その噴火年代を明らかにしようとする研究である。10世紀に噴火したとされている白頭山の噴火年代が確定すれば、渤海国滅亡との関係の有無や、その火山灰がわが国の東北、北海道へ飛来してきて遺跡に堆積していることから、それらの遺跡年代確定にも大いに役立つことになる。目下、中国科学院瀋陽応用生態研究所と共同で進めている。

金銅製造物の保存科学的研究 金銅製造物のうち鍍金製品の鍍金層は数十ミクロン以下の薄層により形成されている。これらの保存にあたり、高吸水性ポリマーを利用したさびの除去が可能となり、また、多くの鍍金遺物の非破壊測定が可能となった。しかし、従来からの蛍光X線分析法ではX線的に無限層厚試料が定量条件となるため、出土遺物に適用することが困難である。本研究は平